

【巻頭言】

創立90周年を迎えて

日本花菖蒲協会 会長 清水 弘

協会創立90周年を迎えるに当たって、まずは故人となられた諸先輩方の努力に対して感謝の意を表したいと思えます。彼らの足跡は戦前から現代にいたる協会の会報を辿るとよく分かります。往時の熱気を感じると共に花菖蒲に真摯に向き合う姿勢が現代を生きる私達の背中を押してくれます。

殊にこれまでの歩みの中で最も困難な時期は太平洋戦争の頃だったことは、会員皆様方には容易に推測できると思えます。具体的には、下記の江戸花菖蒲（戦前品種）の品種数の推移をもってお分かりいただけます。

1903年 小高園300品種以上

資料：「水栽四君子」 東京三田育種場発行

1935年 東京花菖蒲369品種

資料：「花菖蒲培養法（附銘鑑）」

日本花菖蒲協会発行

1973年 江戸古花 124品種

資料：「江戸ハナショウブ古花一覧」

誠文堂新光社発行ガーデンライフ誌

2019年 江戸古花 125品種

資料：「緑化に関する調査報告（その46）」

東京都建設局発行

更に、「旧堀切園の品種番付に記載されていた品種が162種あったにも関わらず、現在の堀切菖蒲園には同名品種が49種となっている。」という葛飾区公園課による指摘があります。

以上のことから、江戸花菖蒲の約2／3が戦中に失われたことが分かります。恐らくは肥後花菖蒲、伊勢花菖蒲にも同様のことが起こったかと思われまふ。戦後の復興期には残った品種の増殖と共に、育種が盛んに行われて新たな品種が生まれて昭和後半からの花菖蒲の大ブームが起こりました。花菖蒲成立時期から今日まで、

花菖蒲発展の原動力となったのは品種改良でした。

こうしたことから、日本花菖蒲協会の役割としては育種や新品種の評価、普及の手伝いが重要であることが言うまでもありません。この際に重要なのが、「種を蒔いて開花した株がすべて新品種となる。」という間違った考え方を正す必要があります。種を蒔いた本人以外の人達の社会的評価によって新品種が誕生します。このことは、日曜画家が描いた作品が絵画展で発表されて審査を受けるということに似ています。その時代々に生きた人々の好みによって新品種の一部が生き残って花菖蒲の歴史を刻んで行くわけです。現在、協会ではそのような仕組み作りを進めています。

一方、我が国固有の伝統園芸植物の一つとして、花菖蒲品種をナショナルコレクションとして認証してもらう準備も進めています。ナショナルコレクション自体の全貌は曖昧としていまいすので、多角的な見方をして準備を進めて行く必要があります。例えば伊勢花菖蒲に就いては江戸花菖蒲や肥後花菖蒲と切り離して伊勢三花としての登録が考えられます。つまり、発祥地毎の歴史文化の要素を付け加えるという考え方です。肥後花菖蒲においてもそのような考え方が成立します。この両者は本来、鉢植え用として改良されて来たため、品種の取り違えは非常に少ないものです。

一方、江戸花菖蒲は花菖蒲園という集団栽培なので、勢いのある品種が隣に植栽された弱い品種を退けたり、花殻摘みを怠って種子がこぼれ、やや違った子株が親株退けたりする可能性もあり得ます。また、切花品種である「蜀紅錦」のように花色が変化し易く「仕入れ毎に色が異なる。」と市場関係者を嘆かすこともあります。品質管理や品質保証等の観点からの見直しも必要かもしれません。系統毎の品種特性とその展示方法は、仏像彫刻における時代様式区分に似ています。植物学的な従来の見方の他に美術品としての様式美という観点も取り入れたらどうかと思います。